ごあいさつ

会主　藤井治童

「竹の心第十三号」を上梓して以来、コロナのせいにするにはあまりにも長すぎる時間が経ちました。福田栄香先生にインタビューをして記事の校正までしていただいたのに上梓が遅れてしまい誠に申し訳ありませんでした。

カナダの初代宇宙飛行士であるダビド・セイン・ジャック君や、竹童社から育った若手演奏家である佐田奏童君や石橋紅童君のことも紹介をしたいとも思っていましたが、ようやく上梓にこぎつけることが出来ました。

さて、私が初代納富寿童先生の内弟子に入って以来、半世紀以上になりますがその前年七月十一日納富治彦先生が三十八歳の若さでお亡くなりになりました。その時私は二十八歳、内弟子としてはとても遅い出発でした。

私が内弟子として入ることになった時、治彦先生が吹く事に才能が無ければ尺八作りで生計が出来るようにと、生前約束をされていた事は尺八作りの名人青木道夫先生の所に尺八製作を習いに行くことでした。その事が現実になったのは言うまでもありません。

内弟子になって四年目頃だったと思いますが先生もお年をとって大勢のお稽古が出来なくなり、ある時より先生の代稽古をする事になり私としては生涯忘れることが出来ない〝プレッシャー〟のかかるお稽古でした。まず先生が座る場所に私が座り、その右脇に先生が座ってのお稽古でし、今思うと針の〝ムシロ〟でした。先生の前で先生のお弟子さんを指導することは言語に絶することでした。

その時以来、長い時間が過ぎましたが、優秀な後継者も育ち、私としては悔いのない尺八家の人生を送ることが出来たと喜んでおります。

納富寿童（寿翁）先生と納富治彦先生
納富寿童重要無形文化財指定記念
琴古流尺八寿会演奏大会
昭和四十二年五月五日

邦楽対談

はじめに

今回は福田栄香先生にお話を聞かせていただきました。

福田先生は祖父母に尺八名手三世荒木古童・初代福田栄香（三ツの音会初代家元）、父に福田種彦（同会二代目家元）を持つ三ツの音会の三代目家元です。

藤井―先生は三歳で初舞台を踏んで以来、家元になるべく運命づけられた道を進んでこられたと思いますが、どのようなお気持ちで精進してこられたのですか？

福田―実はそれほど真っ直ぐに、この道だけを歩んで来たわけではないのです。

幼い頃から箏、三絃の稽古は一生懸命しましたが、邦楽の世界のみでは飽き足りず、高校卒業後に演劇の道に進みました。今までとは全く違う環境で学びながら、多くの素晴らしい方々に出逢い、舞台を創り上げようとするプロの〝表現者〟としてのエネルギーと信念に触れることが出来ました。

そんな中で、ある時、私の表現者としての原点が鮮烈に蘇る瞬間がありました。それは、子供の頃に聴いた父・種彦の舞台です。その演奏に涙した当時の自分を思い出すと、居ても立っても居られない気持ちとなり、邦楽の世界に戻ることを決意しました。両親に頭を下げ、改めて家の芸、伝統音楽を守り伝承して行きたいと申し出ました。演劇の道に入って四年の月日が経った二十二歳の時でした。

私が、今まで多くの一流の演奏家の方々と接しながら学ぶことが出来たのも、福田の家に生まれ育ったからです。置かれた環境に感謝致しますのと共に、師から弟子へ、親から子へと受け継がれて行く芸の歴史、伝統に想いを馳せ、それを紡ぐ一端として存在出来ることに幸せを感じています。

藤井―福田先生の御祖父さんは三世荒木古童で、我々〝白譜〟のグループの大先輩にあたる人です。

私も納富寿童(寿翁)の内弟子に入って六年間修業して、古童先生の〝白譜〟の尺八を受け継いだ訳ですが、栄香先生は、三世荒木古童のお孫さんとして私たちの尺八の演奏についてどのようなお考えをお持ちでしょうか？

福田―荒木派から続く尺八琴古流の〝白譜〟は、魅力的且つ高度な細かい

手法が、メロディーの中に沢山導入されています。その中には、華やかさや、力強さ、儚さや切なさ、洒落の利いた小気味良さ等々数え切れないほどの、素敵な表現が散りばめられています。

その音曲を、文字で起こした譜面から、要するに、目で手本を見ることで学び取ろうとしても無理でしょう。先ずは、きちんと向き合って師匠から習い、また、名人と呼ばれてきた数々の先人達の音を聴き、数え切れないほど自分で吹いて稽古を重ね、それが外曲ならば、糸方との合奏の稽古を何度もすることで曲を理解し、やっと自分のものになって行くわけですね。

〝白譜〟尺八と、私共のいわゆる九州系の歌と三絃、箏の演奏は、相性も良く、歴史的にも数々の名コンビが生まれました。名演集として遺されている、祖父・三世荒木古童と祖母・初代福田栄香の合奏は、今聴いても、それぞれの個性が際立ちながらも、互いの抜群の呼吸で見事な演奏を織りなしています。

昔の尺八のお稽古場には、常に糸方の先生が身近にいたということですから、自然に学び体得することが出来たのでしょう。現在では、お稽古場の事情も変わり、勉強の機会が不足して大変残念だと思います。

原曲をよく理解して、歌や糸のメロディーをしっかりと把握し、出すところは出し、訴えるところは訴え、相手の呼吸を受けて立てるところは立て、バランスの良い、そして、心に響く尺八演奏をして欲しいと感じます。

外曲の場合には、合奏するほどに、三曲合奏としての尺八の立ち位置が見えて来るはずです。

昭和の時代の全盛期を華やかに彩ってきた三曲の歴史の中で、私共と〝白譜〟は共に歩んで参りましたが、現在、〝白譜〟尺八が大変少数派になってしまったことは大変残念です。今後の〝白譜〟尺八に、大きく期待したいと思っています。

藤井―私たち〝白譜〟の尺八を演奏するものとして、自分たちの尺八の稽古をしっかり行うとともに、糸方との合奏の稽古もしっかりしなければと改めて思いますね。

邦楽の演奏家が老齢化しているためか、邦楽界全体が衰退しているようにも感じているのですが、栄香先生は邦楽界の活性化についてどのように感じておられますか？

福田―私は世界の人達に邦楽の良さを発信する活動として、ドイツ・アメリカ・アジア等で海外演奏活動を行って来ました。実は、世界には邦楽ファンが大勢いらっしゃいます。むしろ、近年では日本国内で邦楽の良さが伝わらなくなってきているのが残念です。

その中で、私は十数年前から邦楽の普及を目的に、源氏物語を原作とする「夕顔」「新浮舟」「青柳」を、演奏に語りを組み込んだ「うた語り」という形で舞台上演しています。ここには勿論、若い頃、演劇に進んだ経験が生かされていると思っています。

文化庁や各行政機関等には、日本の伝統音楽を発信する活動にもっと力を注いで下さるよう大きく望みます。

邦楽のプロが安心して演奏や後進の指導を行っていける環境の整備が重要です。

ところで藤井先生の所では、若い人が育ってきていますね。どんな工夫をされたのですか？

藤井―藝大がすべてという訳ではないのですが、私の教え子の中から、佐田奏生君が藝大研究科に在学しており、現在、フランスに留学して作曲の勉強をしています。また、石橋えりか君も藝大生として勉強中です。

彼らは世田谷の体験教室で興味を持って稽古に来ました。小学生の小さな手でも尺八を吹けるよう一夜切という一尺一寸管を作って吹かせてやったりして、じっくり我慢強く育ててきました。

最近、ようやく面白味が分かって来たのか、やる気も出てきて順調に育っています。これからが正念場ですが、古典をしっかり勉強した上で、更に新しい道を切り開いていってほしいと思っています。

最後になりますが、福田先生はまだまだお若いですが、これからの抱負をお聞きかせください。

福田―三ツの音会家元としての芸を継承し、門人の育成指導をすること、尺八の方々に向け合奏指導をして行くこと、そして演奏家として自身も成長することが第一です。

演奏や教授活動の他にも、日本三曲協会や生田流協会の理事としての仕事、国際交流や普及活動等、やらなくてはならないことは沢山ありますが、日々の精進を重ね、いつまでも前向きに健康で歩んで行きたいですね。

宇宙飛行士 ダビド・セイン・ジャック君のこと

藤井治童

宇宙飛行士からの手紙

令和二年一月のある日、我が家に分厚い国際郵便物が届きました。差出人を見るとダビド・セイン・ジャック君（以下、ダビド君）からでアメリカの宇宙センターＮＡＳＡからでした。開封してみるとあのダビド君が立派な宇宙飛行士の姿で微笑んでいます。

二〇一八年十二月から二〇一九年六月までソユーズＭＳ１１国際宇宙ステーションで長期滞在をしてきたということでした。

ダビド君はカナダ人ですが、カナダ宇宙庁からの証明書にメッセージが添えられていました。

「宇宙探査は、我々の世界及び我々自身に対する新しい視点をもたらし、人間性を豊かにしてくれます。私と共に宇宙を旅したこの尺八楽譜を通じて、宇宙への冒険に参加してくださった藤井先生に対して、感謝の意を表します」

ダビド君が宇宙船の中で「三谷菅垣」を演奏している写真も添えられていました。

そして私の手書きの「三谷菅垣」譜本には「ＩＳＳ（国際宇宙ステーション）」のスタンプが押されていました。

ダビド君との出会い

ダビド君は二十年ほど前、横浜で尺八教室を開いている鈴木鼎童君から紹介されて私の所にやって来ました。

鼎童君の紹介では「高知で藤寿会の尺八教室を開いている池添匡童君の弟子にダニエル隆童君がいますが、彼の知り合いでダビドという人が尺八を習いたいそうです。ダビド君は三鷹の国立天文台で天文学を研究している人で、ハワイにあるすばる望遠鏡の開発にもあたっているそうです。忙しい中で横浜三ツ沢の私の稽古場まで来るのは大変だから、藤井先生の所で習ったらどうですかと紹介しました」ということでした。

尺八の稽古

ダビド君が入門して来た時の印象は、実直で大変礼儀正しい青年でした。また、彼は来日して半年くらいしか経っていないのに日本語はペラペラで、能力の高さを感じました。

約二年間本曲を中心に稽古をしましたが、大変熱心だったと記憶しています。

ある時、ダビド君から「今は天文学を勉強しているけれど、医学の方もやってみたいですが、今からでは遅いでしょうか？」という相談を受けて「あなたはまだ三十歳くらいでしょう。私が専門家になると決心したのは二十八歳だったし、何を始めるにしても遅いことはないと思いますよ」と、そんな話をした記憶があります。

ダビド君のその後

２年間ほど稽古をした後、ダビド君はカナダに帰りましたが、その後、医学博士になったと聞きました。すごいことだなと思っていたら、今度は宇宙飛行士になっていました。

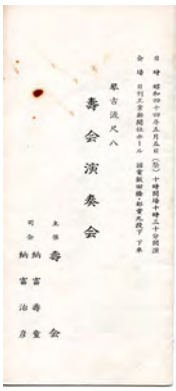
ダビド君の才能には全く敬服するのみですが、彼が宇宙の旅に私の手書きの「三谷菅垣」譜本を連れて行ってくれたことを感謝しています。ダビド君からの便りを我が家の「家宝」にしたいと思っています。

私は永年、琴古流尺八の隆盛を願って活動をして来ましたが、ダビド君の活躍も一つの契機として、これからも後進の育成を続けて行きたいと思っています。

思い出に残るプログラム

藤井治童

日時　昭和四十四年五月五日（祭）
会場　日刊工業新聞社ホール
琴古流尺八　寿会演奏会
主催　寿会
司会　納富寿童・納富治彦


琴古流尺八
寿会演奏会
主催　寿会
司会　納富寿童
納富治彦

このプログラムは私が東京に出てきて初めての演奏会のものです。この出演には面白い話があります。

出演費が高くて、前年の会に出演していなかったのですが、納富治彦先生から今年は出るようにとのお話があり、今年も出られないとお断りしましたが、今年はどうしても出演するように、その代わりに、出演費は半額で良いとの事で、出演させて頂くことになりました。

その時の話です。「藤井、出演費が半額だから糸方も半分だよ」と言われビックリ。初めての舞台で「一丁（三絃）一管」とは大変厳しい舞台です。

曲目は「まゝの川」で、三絃は藤井久仁江先生（後に人間国宝）尺八は藤井久男となっています。私は練習に明け暮れました。「紋付・袴・帯」すべてを先生に揃えて頂き、おまけに、素晴らしい舞台と経験、勇気を与えて下さった治彦先生には感謝の言葉しかありません。

演奏会の下合わせが目黒鷹番町の藤井先生のご自宅で行われ、緊張の中、下合わせが始まり、前歌の途中で階段を上がって来てじっと私を見ている方がいました。数分、いや数秒だったかも知れません。

その方が藤井先生のお母様、阿部桂子先生で、下合わせが終わった時、分厚い眼鏡をかけた阿部先生が私に「あなた頑張りなさいよ」と言われた事を今も忘れることが出来ません。

新宿四谷の稽古場に戻り、治彦先生へ報告しましたが、まだ東京に来たばかりで「糸方」の先生方の知識がなく、先生に伺うと、笑いながら「生田流の重鎮、阿部桂子先生だよ」と教えてくれました。

さて、演奏会当日、治彦先生ご自身に着付けをして頂きました。「ここを締めると力が入る」と言われ肌着の腰帯、紐帯を胸より少し下に締められました。少し息が苦しかったけれど力が入って思い切り吹く事が出来ました。

演奏の出来は「まあまあ」というところでしたが、そのテープを北九州門司の母に聴いてもらいたくて送りました。

昔のリールテープだったので、多分、聴く機会はなかったと思います。母が亡くなるまで大切に保管してくれたそのテープは、後日、姉から私の元に送り届けられました。

内弟子から独立まで大変でしたが、乗り越えて今があります。ただ、父親、母に生の演奏を聴かすことが出来なかったのが一番残念で心残りです。

思い出に残る一枚のプログラムです。

竹童社・藤寿会の活動

初吹き会

例年、初吹き会を行っています。生田の先生方と山田の先生方に合わせていただいています。

いつも遅くまで演奏が続き申し訳なく思っていますが、高名な先生方が笑顔を絶やさず合奏に付き合っていただいています。

三曲名流演奏会

毎年国立劇場で行われていた三曲名流演奏会に参加しました。

令和五年秋季には国立劇場での最後の演奏会で「夕暮之曲」を演奏しました。令和六年からはイイノホールに出演しています。

山田流創立百周年記念演奏会

令和五年四月十六日国立劇場で開催された山田流創立百周年記念演奏会に琴古流協会百名が参加して「雲井獅子」の大合奏を行いました。

琴古流協会演奏会

毎年都内北とぴあさくらホールで開催されている琴古流協会演奏会に出演し、本曲や合奏曲を演奏しています。この演奏会で佐田奏童と石橋紅童が「鹿の遠音」を合奏しました。また、新人奨励会で大出翔童が演奏をしました。

世田谷三曲ゆかた会

例年、世田谷三曲ゆかた会に、単独あるいは山田流や生田流の社中との合奏で参加しています。

平成十年にスタートした「子ども体験教室」で学んでいる子どもたちの演奏も大変人気があります。

稽古場開きの記

佐藤悠童

編集長命令により、稽古場開きの記を書かせていただきます。

すでに多くの方々にお越しいただいておりますが、かたちのうえは拙宅の十二畳の和室が、竹童社の下合わせなど稽古場になっております。

以前、その場所にはカミさんの実家があり、そこでも何回か下合わせが行われたこともありましたが、昨年五月に娘婿さんが建ててくれた家が出来上がり、普段は、慶應義塾大学の竹の会など、カミさん（と娘）の稽古場となっております。

これまでは谷中の信行寺が稽古場でしたが、師匠がその玄関の石段を上がるのが厳しいようで、拙宅の三段の玄関の方がまだ楽とのことから、最近の状況になってまいりました。一応、十二畳はありますが、糸方が入ると、廊下や居間にはみ出しての稽古になっており、多少のご不便をおかけしております。

師匠からお祝いに戴いた内田藍亭師の筆になる『竹窗（窓）風動』の掛け軸が、小さな床の間に飾ってあり、竹童社藤寿会の稽古の雰囲気を醸し出しております。

この家は、スウェーデンハウスという会社（日本の会社です）の建築で、分厚い断熱材が床下・壁・天井に入っており、また窓は木製枠の三重硝子です。ですからその防音効果は絶大で、音が外に漏れることはほとんどなく、大勢の合奏でも問題はありません。また、酷暑の日でも温度は二十五度前後、湿度も六十％以下と快適です。

皆さんには、気持ちよく演奏していただけることと思います。

竹童社尺八本曲講習会（令和六年八月）

あしあと

佐田奏童

小学三年生ごろ、その当時、近所でよく遊んでもらっていた年上の方に、これまた近所にいらした藤井先生の自宅に連れていかれました。稽古を見ていたのですが、藤井先生より「来たからには尺八を吹いてから帰れ」とのことで、尺八を吹いたところ音が鳴り、それが嬉しかったのか、始めることとなりました。

始めたは良いもののスポーツをメインにやっていたので、それほど真剣では無く、稽古に行ったときのみ尺八を吹くといった感じで続けていました。中学生のころは部活動にのめり込んでいたので、より一層、尺八から遠のいていたように思えます。

転機となるのは高校受験のときです。スポーツ推薦と一般推薦を頂いていたのですが、試しに尺八専攻のある東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校を受けてみろとのことで、受験したところ受かってしまい、その高校へ進学することとなりました。

この頃、スポーツはもちろん、科学や建築といったことに興味があったので、受かっていなければ別の道に、ましてや尺八を続けていたことすら怪しいところでした。

東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校は特殊な高校で一学年四十人程で一クラスしかありません。また全員が音楽の各専門を持っており、部活動が無い代わりに放課後、東京芸術大学にてその専門の教授や講師によりレッスンを受けます。

学校の音楽の授業程度しかやっていなかった私は、西洋音楽に触れるきっかけとなりました。ただ、尺八のレッスンは殆どが三曲、古典でした。

東京芸術大学に入学すると、レッスンや実技試験は、三曲や本曲ですが、尺八のみのアンサンブルや現代曲、他の楽器との合奏、作曲家からの依頼など、より一層、邦楽以外の音楽に接する機会が増えました。

また、コンクールには良い面だけでは無いと思いますが、先生方の勧めや学費の足しにしようとの思いもあり、いくつか出場し受賞させていただきました。

そのころ、アンサンブルとなると一尺八寸以外の長さの尺八も吹く機会があるのですが、私が尺八の持ち手が上下反対の逆手であるため、満足に使用できる尺八が無く、尺八を制作する製管に興味を持つようになります。後に藤井先生や尺八工房などで教わり、修理はもちろん、自らの楽器を製作するまでにはなります。

同大学院に進学後、長年三曲や古典を重点的に行い、コンクールで受賞するまでにはなったので、新しいことをしよ

うと考え、フランスのパリ国立高等音楽院に留学し、即興音楽を学びます。

本来、音楽の大部分は即興により成り立っていました。西洋音楽では、アリアの旋律に即興的装飾を加えるコロラトゥーラや、与えられた低音に即興的に和音をつける通奏低音法などがみられますし、鍵盤楽器による即興演奏も盛んで、多くの変奏曲やフーガなどが生まれました。

古典派、ロマン派では主題を発展させる即興が盛んで、ベートーベン、リストらはその名手でした。

日本の音楽も津軽三味線にも見られるように元々は即興の要素が強いです。しかし、記譜法が発明され、楽譜が広がる中でしだいに固定化され、即興性は薄れていってしまいました。

私は即興演奏を見直すとともに、世界の即興演奏を学ぶことで、新たな日本音楽を創造したいと考え、留学しました。

お客さんの素直な反応や、レベルの高い演奏家とのセッションは大変良い経験になりました。

ただ、新型コロナウイルス蔓延の影響により、途中で帰国することとなりました。今年からフランスに滞在し、新たなことに挑戦します。

私は古典音楽と新しい音楽の両面が必要だと考えます。ただ、双方には課題もあります。古典では、従事者の不足はもちろんですが、本物の精神や音を持った方の演奏がなくなったと感じています。

例えば日本の祭りで行われる音楽も昔の映像や録音したものを聴くと圧倒されるものがあるのですが、現在では、音をなぞっているだけの音楽で、形だけを残そうとしているものが多いと思えます。

邦楽もこのような傾向があり、危機感を感じております。また、新たに作られる音楽もどこかで聞いたことのあるようなものが多く、斬新さや中身の無いものが多くあると思います。

私は音を追求して、古典と創造の両面からアプローチしていきたいと考えています。そして海外にルーツを持っていることもあり、日本と海外の架け橋になれればと思っております。

佐田奏童（奏生）

一九九四年カナダモントリオール生まれ。幼少より尺八を始める。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。フランスにあるパリ国立高等音楽舞踊院に留学し、東京芸術大学院音楽研究科を修了。

大学在学時に市川市文化振興財団主催、第二七回新人演奏家コンクールで邦楽部門最優秀賞を受賞。

二〇一四年、二〇一五年、二〇一六年ＮＨＫ邦楽オーディションに合格、ＮＨＫにて放送される。

第三回利根英法記念邦楽コンクールにて最優秀賞を受賞。

国際尺八コンクールｉｎロンドンにて二位を受賞。

イタリアを代表する「Suoni D'Arpa」のコンペティションのデュオ部門にて二位を受賞する。

他ジャンルとの演奏を積極的に行っている。

「結の会」を立ち上げて

石橋紅童

二〇二三年九月二七日、日本橋劇場で旗揚げ公演となった「結の会」。（結の会同人囃子：藤舎英佳／舞踊：花柳藍五郎／箏：高桑杏奈／尺八：石橋紅童）

遡ること二〇二二年一二月、藝高（東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校）の同期からの一本の電話から、私たちの挑戦は始まりました。私たち同期は、箏・尺八・囃子・日本舞踊と一人ひとり違うジャンルで活動しており、その強みを生かした古典芸能を身近に感じてもらえるような公演がしてみたい、と以前からぼんやりと考えていました。

電話の内容は「同期で会を結成し、自主公演を行わないか」というものでした。

その頃、公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京のスタートアップ助成の公募が始まっており、その事業に応募することにいたしました。これまでにも、藝高同期で和楽器ワークショップを開催したり、演奏会に参加したりということはありましたが、大きな会場での自主公演はまだ経験がありませんでした。公演の企画・運営に携わったことも、チラシを作ったことも、予算の管理をしたこともなく、右も左も分からない状態でしたが、「同期で演奏会を開きたい、学生のうちに、自主公演を経験したい」と強く思い、「一緒にやりたい！」とすぐに返事をしました。ここから、怒涛の九か月間が始まりました。

会議を重ね、演目の内容を決め、助演者に連絡をし、会場を押さえ、一つの家に集まって終電ギリギリまで作業…。やっとの思いで提出した企画書は、無事に採択され、会に向けて本格的に準備を進めることになります。スケジュール管理、広報、経理、ＳＮＳ担当、スタッフの手配など、同人四人だけで全ての運営を行うのは、予想以上に大変でした。

私は主に経理を担当し、収支予算書の作成やチケット売上の管理等を担当しました。日々変更、更新を繰り返す収支予算書には、何度も悲鳴を上げていました。公演までの一か月は、ほぼ毎日チラシとチケットをカバンの中に忍び込ませて、とにかく宣伝をしました（笑）。

本当に公演まで辿り着けるかと何度も不安になりましたが、チケットの申し込みが届いたり、プログラムが完成したりすると、段々と形になっていく嬉しさと、あと少し気を引き締めて頑張ろうという思いがこみ上げてくるのを実感しました。

さて、ここで「結の会」公演で演奏した二曲についてのお話に移ります。

まずは、宮城道雄作曲《泉》

この曲は大学時代から演奏したかった曲で、この機会に挑戦してみようとということで選曲しました。藝高同期の生田流箏曲家・高桑杏奈さんとは、これまでにも何度も二重奏を演奏してきましたが、この《泉》が今までで一番難しかったです。

公演前には、藤原道山先生にご指導を賜り、「箏と尺八の掛け合いを感じながら、聴いている人に幸せを届けられるように」とのお言葉をいただきました。

次に、《賤の小田巻》

この曲も、初挑戦が盛り沢山でした。まず、日本舞踊の地方として演奏すること、次に、尺八の手付をすること、加えて九寸管での演奏であること。

手付をする場所は大きく分けて二か所で、長唄の演奏に加わる形で演奏する部分と、箏と尺八だけで四分間つなぐ合方の部分でした。長唄がある部分は、一度三味線の譜面を尺八譜に書き起こし、そこから手を装飾したり、掛け合いになるようにしたりと工夫しました。

合方の部分は、一から作らなければならず、高桑さんと練習室に二日間缶詰めになりながら手付に励みました。手付は藤井治童先生や川瀬露秋先生にご指導いただきました。様々な手法を使ったより映える表現、節のつなげ方等、具体的にご助言をいただき、直前まで変更を重ねながら、より豊かな演奏を目指していきました。

聴きに来てくださったお客様から「元から楽譜があるのかと思うような自然な手付だった」と言っていただけた時は、とても嬉しかったです。舞踊の動きや間合いを感じ取りながらの演奏は、普段とはまた違う難しさがあり、大変勉強させていただきました。

ついに迎えた本番当日。あっという間に開演時間を迎え、自分の出番がやってきました。席が埋まらなかったらどうしようという心配をよそに、緞帳が開くと満員のお客さんが目の前の景色に飛び込んできました。

大きな会場で演奏する緊張感、公演を無事に迎えられた安堵の気持ちや、家族、先生方、聴きに来てくださったお客様、会に関わってくださったたくさんの方々への感謝の気持ちなど、たくさんの思いがこみ上げてきました。最後まで公演を駆け抜けることができた達成感は、今でも忘れられません。

この経験を通して、一つの公演を作り上げるには、多くの人に支えられていることを強く実感いたしました。藤井治童先生を始め、竹童社・藤寿会の皆様もたくさんご来場いただきまして、本当にありがとうございました。

各々がさらにレベルアップし、また再集合して第二回を開催できるよう精進いたしますので、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

特攻とその後の人生

森山珠童

時の流れは速いもので、私も近々九十七歳となり、現役で尺八を吹いている稀有な存在になってしまいました。

薄れゆく記憶の中から若かった頃の「特攻」を目指していた日々と、戦後、尺八に巡り合ったことなどを書いてみたいと思います。

「特攻」の時代

「特攻」については「竹の心」12号に投稿しましたが、今回、編集者からの要望もあり当時の写真等も加えて少し触れてみたいと思います。

昭和十九年七月九日、出陣の朝の写真です。私は十六歳八か月でした。

甲種予科練習生、「予科練」に入隊した私達は厳しい訓練の毎日を過ごし、昭和二〇年二月卒業しました。

卒業後、通信のできるパイロットが求められ通信学校に入校しますが、航空機の多くが撃墜されたので、潜水艇による特攻を行うための訓練を受けた後、「海竜隊第一一突撃部隊」に配属されました。

この部隊は太平洋戦争末期の昭和二〇年一月に編成されたばかりの部隊でした。

「海竜」は大型の特攻船が全滅状態になった中で頼りにされた局地戦専用の小型特攻船でした。

写真に写っているのは同期の者で、下田沖でグラマンからのロケット弾が海竜に命中したものの不発弾で、沈没した後に引き揚げられたものです。

昭和二〇年八月一五日に終戦の玉音放送がありましたが、私の所属した部隊では仲間と激論をした後、「戦うべきだ」と司令官に出撃を懇願しました。

艦長の山田少尉と私は大分県の佐伯基地に行くことになり、外泊許可を得て、家族の住む板橋へ帰り遺書をしたためたりしました。翌朝、母からは「決して無理せず、生きる機会があったら

必ず帰って来なさい」と強く諭されました。

東京駅から九州へ行く途中にはもう復員する兵隊を見たり、広島の原爆投下跡の悲惨な姿を見たりしました。

佐伯に到着して3日後「本隊は解散する。各自退職金と食料を受け取り、復員せよ」との命令を受けました。「特攻魂」がもろくも崩れ去り、混乱の中、無蓋の復員列車に乗って我が家に帰り着き、久々に家族の一員に戻りました。

竹との出会い

竹との出会いは偶然でした。

戦後、私は歯科医師として西武線の東久留米で昭和三八年から数年開業しておりました。駅から歩いて数分、田園風景も豊かで周囲は田んぼ、小川も流れ、晴天時には富士山も見え、家内、長男五歳、長女二歳の恵まれた環境で、診療に励んでいました。

ある日、患者さんとして滝沢淳子さんが来られ、ご自宅が近く、時間にも余裕があるとのことで歯科助手をお願いし、滝沢家との交流が出来ました。

ご自宅がお琴の先生とのことで、家内、子供たちのお稽古が始まり、私も滝沢文童先生に四ツ谷の稽古にご同行して頂き、人間国宝納富寿童先生を紹介して頂き、入門を許可されて昭和四五年年八月から尺八人生をスタートしました。

私の父親もハーモニカ・尺八をよく吹いていましたので、幼稚園の頃からハーモニカを習っていました。小学校時代プロの先生に教えて頂き、中学でもバンドに入り、皆で合奏を楽しみました。

竹の方は築地の診療終了後、四ツ谷に通って基本から丁寧なご指導を受けました。待ち時間には内弟子の藤井先生が予備練習をして頂き、本当に感謝でした。

また土曜日の夕食後には滝沢文童先生のご自宅に伺い、ご指導をして頂き、四か月後のお弾初めで黒髪を一人吹きした時の緊張と失敗は今も忘れません。

納富先生はご高齢で第一線も退かれ、目黒の柿の木坂のお宅に伺い、藤井先生に稽古をして頂き、納富先生は隣部屋で聞きながら何かとご指導をして下さり、藤井先生も大変緊張されたと伺いました。

残念ながら納富先生はご高齢によりご逝去されましたが、その後は義弟である山下慶童先生が引き続きご指導して下さることになり、新宿区大久保のご自宅で約一〇年ご指導して頂きました。

山下先生もご高齢により逝去され、再び藤井治童先生にお願いして藤寿会に入門させて頂き、現在に至っております。

私も高齢者の一人になりましたが、体調も何とか保っておりますが、長時間の演奏では左手指先の疲れが出てきています。今の所、少し休憩し指先運動をすることで少しづつ回復し、再度練習する状態です。

とにかく竹は大好き、来年の吹き初め曲を選曲し、今から練習に励む所存です。

共に老いゆく友、尺八を楽しむ

池添匡童

竹童社創設以来今年の令和六年で三十六年と記憶します。高知支部も竹童社と同数の年輪を重ねた事となり、支部を預かって以来一度として欠く事なく三十四年間継続して参りました演奏会も、我が身の衰えには勝てず令和四年で途切れる事となりました。

自衛隊退官記念に撮影

支部全盛期は、九名程度を抱え本職と尺八指南の両刀で多忙な週末を過ごしていた事が懐かしく思い出される。

古く中国の故事に、子曰く吾十有五にして学に志し三十にして立ち四十にして惑はず五十にして天命を知り六十にして耳順う七十にして心の欲する所に従ひて矩を踰えず。と子は人生を顧みていますが、「矩」（のり）とは道徳や規律・規則を指し、「踰えず」は超えずという意味で、大・小・是・非は兎も角も真に人生訓だと感ぜられる。

良寛和尚は「わが人生何処より来たり、去りて何処にか之く」と双方、老いと逝くことを綴っている。

今なら抑えたであろう言動が思い出される。その様な私を支えてくれた真の友は尺八であり、裏切ることなくついて来てくれる。しかし齢による衰えは避けられず、目・腰・平衡感覚・指の運び等の衰えが如実に現れてくる。その時に辞める？　いやいや私の生き様の一つである尺八であり、そこまで気力は衰えていません。

ならばどの様にして尺八を楽しんでゆくか、若い頃は伸び代が沢山あり練習する励みとなりましたが、老いを感ずる今は伸び代よりも培ったものを努めて維持する楽しみ方となりました。

藤井先生はじめ、私よりご高齢の諸先輩を差し置いて真に恐縮ではございますが衰えを感ずるのは人夫々に早遅がありますので、ご容赦賜りますようお願いを致しまして私の老いの楽しみ方をご紹介致したいと存じます。

一つに　口筋の衰えを抑制する為に努めて三十分以上は吹く。

二つに　間に拘わらず自分の感性で本曲を吹く

三つに　外曲の本手・替手、打合わせ

曲の合奏譜を編集し稽古に活用する。

現在概ね完了した外曲は「茶の湯本手・替手」「六段の本手・替手」他「打盤・横槌」「鳥追・神楽」「楠の露・夕顔」「八千代獅子・萬歳獅子」「玉椿・袖の雨」「桜川・八重霞」の打ち合せ譜が概ね完了し稽古に活用している。

この編纂作業は互いの間を確認しつつパソコンで並べ換えてゆき、最終的には音源を基に確認吹奏で点検するため時間と手間がかかるが、これも又楽しいものであります。

四つに　最近は吹く時間よりも音源を基に唄う事が長くカラオケになりましたが、これにより緩急を浚うのも楽しいものです。

以上四つほど今楽しんでいる事を箇条書きで記させていただきました。

人夫々に老いの楽しみがあろうかと存じますが楽しい内が華であります。

我が身に痣が残る如く、吹き料の尺八にも指・露・握り跡等の様々な跡を残しつつ、年毎に吹き料の深みを増して行きたいものです。わが人生もかく有りたいものと考えます。

最後の演奏会で吟龍虚空を演奏

本曲らしさを求めて

城戸菖童

令和五年の今、振り返って見ますと私は尺八を四十九年吹いてきたことになります。あと一年で五十年。我ながら凄いと思います。

初代人間国宝・納富寿童師の童門会に入門したのは三十三歳の時でした。

藤井治童先生は、当時、納富寿童師の内弟子で、私は藤井先生から指導を受けることになりました。

入門以前は五年程、フルートを習っていました。フルートでバロック音楽を吹くのが夢だったのです。

ある時、とある飲み屋で友達と飲んでいたら、フルートの話をしていたのですが、カウンターの向こう側の板さんが、自分は尺八をやっていて、店に持って来てあるので吹いてみな、と手渡されて、吹いてみました。

フルートと尺八の唄口は、ほとんど同じなので、一発で音を出せました。板さんに凄いなとおだてられ、その気になってしまったのが運の尽きで、尺八の世界に入り込み、抜け出すことが出来なくなり、今に至っています。

最初から音が出て、藤井先生の指導の下、吹いていましたから、糸方の先生から、いい音ですね、とか言われて、有頂天になっていました。

しかし、一年・二年たつ内に、いい音ですね、というのは、決して誉め言葉ではないということに気づきました。

糸方の先生はあなたはフルートのような音しか出せないのね、尺八の音は、そんなものではないのですよ、と言いたかったのだと、気付いたのです。

今、思い返しても、まったく恥ずかしい限りです。

因みに、フルートで尺八本曲は、全然吹けません。フルートでは、♯か♭での、半音の上げ下げしかないのに比べて、本曲のメリは、非常に多彩です。フルートには顎の上げ下げが無いのです。

また、音の質についても、フルートのさらっと乾いて、明るい音質に比べて、尺八では、むしろ湿って暗い感じの音が求められることが多いと思います。

そのような日々を過ごして、入門して十年位経った頃、と思いますが、納富寿童師が亡くなられました。

その後、色々あった中で、藤井治童先生が童門会を出て独立し、竹童社を

設立され、私たち藤井先生の門下は、竹童社内の藤寿会に属することになりました。

藤寿会設立に当っては、まず、規約を作り、会員名簿を整え、会誌を発行する等、藤井門下一同、奮い立った事を覚えています。

私自身については、前にも述べましたが、この時期、フルートではなく、尺八らしい音をどうしたら作り出せるかを模索していました。

私の結論は、フルートでは吹けない本曲を、懸命に吹くことでした。

三曲合奏時の尺八音を作るために、本曲を吹こうとしたのです。三曲合奏のための尺八音を出すため、音を鍛え磨くことが目的でした。

かつて私は、本誌の誌上で、本曲の世界と、箏、三絃、尺八合奏の外曲の世界とは、ジャンルが違い、こそ価値観も違うことを述べてまいりました。

その価値観の違いを、本曲は精神性を求め、外曲は音楽性を求めていると色分けして説明してみました。

私の都山流尺八の友人が琴古流の本曲は面白くないと言います。

これに対して私は、都山流の本曲も、勿論外曲も、音楽性を求めているからであって、その尺度で精神性を求める琴古流本曲を測れば、面白く感じないのかもしれないのでは、と反論してみました。求めるものの観点が違うのじゃないかと。

納富寿童師は、本曲について〝本曲らしく吹ければ一人前〟と言っておられたと、聞いたことがあります。

都山流の友人に求めるものが違うと反論してみましたが、もしかしたら、その友人にとっては、私の吹く本曲が、本曲らしく聞こえなかったのかも知れません。

そう言えば、私の本曲は、三曲合奏のための音を作る手段であって、本曲らしさを目的としてこなかったように思います。

尺八歴五十年になりますが、〝本曲らしさ〟を求める旅は、この歳になって、今から始めなければなりません。

〝鈍足、亀の如く。日、暮れて道遠し〟

私の趣味

高野鬼童

私の趣味は地唄三曲合奏と本曲を吹くことです。尺八は昭和四十一年、藤井治童先生の門を叩いたのが始まりです。

東京での生活とお稽古は十年続き、勤務先の都合で名古屋の工場に転勤になりましたが、治童先生に無理をお願いして名古屋まで通い稽古を二年間続けていただきました。本当にありがたいことだったと思います。そして、その期間に五十二曲を教わり、鬼童の名前をいただきました。

名古屋では、治童先生の代わりの琴古流の先生を見つけることが出来なかったため、会社の尺八サークルに箏の田中比呂子先生にお越しいただき、箏と三絃の三曲合奏を教えていただいていました。また、時々東京での舞台にお声がけ頂いた際に、同時期に習っていた皆様との技量差の大きいことを痛感するとともに、それは励みにもなっていました。

平成六年には、故郷の岡山へ帰り兼業農家をやりながら、医療機器メーカーの中小企業に勤め、研究開発部で空気を原料として酸素を九十五％まで濃縮する医療用酸素濃縮器や窒素を四ナインまで濃縮する窒素濃縮器を作りました。酸素濃縮器は、肺の悪い結核後期や肺がん、またコロナウイルス感染した患者さん方に役立っています。このように、農業と中小企業での兼業に励みながら、尺八が楽しめる相手を探したものの、約九年間の空白がありました。

ある時、大学の同窓会があり、その中に都山流の大師範の方がおられて「岡山県美星町に横山勝也先生がおられる」と教えられ、平成四年十二月に開催されていた横山先生の演奏会へ行き、その後お会いできるよう自宅まで同氏が同行して紹介してくださいました。

横山先生は美星高等学校廃校後の校舎を美星町と協力して生かせるよう、日本の尺八本曲を世界へ広める拠点としてここに『国際尺八研修館』を開いておられ、自宅も美星町に新築し移住されていました。

先輩が紹介してくれた際に「何か吹いてみなさい」と横山先生に言われましたので、たまたまそこにいらっしゃった箏の山路みほ先生と「茶音頭」を合奏していただきました。そして、翌月の一月から入門して本曲を教えていただくことになったのです。しかし、横山先生は二月にドイツ演奏旅行へ出かけられた際、その舞台中に脳梗塞で

倒れられ、尺八を吹くことができなくなってしまったのでした。

その後も横山先生と同研修館の諸先生方（古屋輝夫先生、眞玉和司先生、柿堺香先生、石川利光先生）が、毎年二回二泊三日の期間で開催されていた「美星本曲講習会」には欠かさず出席していました。その会には、全国から五十～八十人くらいの尺八愛好家の方々が参加して、その中にはいつも外国の方も数人いました。

一方で、横山先生のお宅に本曲の勉強に行った時期と並行して、箏の山路先生にも三曲合奏を教えていただくようになりました。山路先生は東京芸術大学卒業後、お弟子さんを教える傍ら、ＮＨＫ－ＦＭ「邦楽のひととき」にも定期的にも定期的に出演され、オーストラリアやヨーロッパなどの海外でも活躍いて、平成二十五年には文化庁文化交流使としてモスクワ音楽院に派遣され、約一年勤めておられました。

その時に同音楽院で尺八を学んでいたイオ・パヴェル先生と親しくなられて、翌年に結婚してパヴェル先生は来日されました。研修館の石川先生のお弟子さんとなられ、東京音楽大学大学院修士課程を修了もされ、現在はサンクトペテルブルク音楽院大学院博士課程で尺八の研究をしながら、日本とロシアで演奏活動を行いいます。

そのパヴェル先生が日本に滞在されている数か月間、本曲を一緒に吹いて教えてもらっています。パヴェル先生は琴古流と研修館の曲を両方とも上手く吹き分けています。また、私が使用していた治童銘の尺八の音が好きだと言ってくれましたので、お互いの尺八を交換して、今では治童銘の尺八を使ってロシアで演奏をしています。

私は治童先生をはじめ、多くの尺八と箏の素晴らしい先生方に教わりました。それぞれの先生方の指導には特徴があり、例えば横山先生は「尺八の吹き始めには必ずロ吹きを十分吹くように」と言われました。パヴェル先生は、お稽古始めに毎回全部の音程の音出しをして、そして琴古流本曲のスリの音程の変化の在り方を練習してから曲に入ります。教える相手により変わるのかも知れませんが、年寄りの私でも音程と鳴りがよくなったと感じています。

藤井先生には今も続いてお世話になっていて、白譜を時々送っていただいています。「夏の曲」や「石橋」のような手元に楽譜がない場合にも、新しく手書きで作ってお送りいただきました。

今は邦楽、特に古曲や本曲を演奏する人が少なくなっているので寂しい限りです。本曲の場合、長管も揃えましたが、吹く機会が段々と少なくなってきました。山路先生やパヴェル先生とお稽古している時間が一番楽しく感じる今日この頃です。

牛飼いと尺八の二刀流

神長修童

栃木県北部、塩谷町の鬼怒川にかかる上平橋からは日光・那須連山高原山が見え、すぐ隣に羽黒山が見える。

牛舎の四方からは鬼怒川と田んぼを通ってきた風が通り抜け、人間にも牛にも最高の居心地を感じさせる。

神長ファームでは私達夫婦、息子夫婦、孫の三代が大好きな肉牛の繁殖と肥育の経営をしている。

高校を卒業してから牛飼いと尺八を始めた。二十二歳で小野崎玉童先生に入門したが、オイルショックによる肥料高騰で牛飼いを断念し、大型ダンプの運転手になった。

数年後、再度牛飼いになった。

その間、二十年近く尺八を手にする暇も、目にすることも無かった。

その後、小野崎先生は他界され、千歳船橋の藤井先生にご指導をいただき、二十年近くになる。

牛飼いと尺八の共通点は〝ガマン〟で、両者ともに理想像への道は険しく遠い。あれやこれやと工夫し、高品質な牛、尺八の音に近づけようと四苦八苦の毎日だ。

牛飼いの作業は危険を伴う。ある日には重機の下敷きになり、またある日には産子牛に角で突かれて九死に一生を得た。二度の事故は自分の未熟さが原因であり、その後は二度とないよう

に注意している。

尺八では、肺から息を出し、体全体を使って楽器に伝えて行く。

息と共に体中からストレスが抜け、体の隅々まで浄化され、体と心のバランスが整って行く。

それはいい塩梅で牛飼いにも効いてくる。

最近、内孫・外孫に牛飼いの技術を伝えるべく足腰を鍛えるためウォーキングを始めた。

二～三年後に牛飼いの修行から戻ってくる外孫とともに牛の環境を守り、三世代　揃って末長く牛飼いをして行きたい。

牛飼いと尺八の二刀流、どちらが欠けても今の自分はない。

両方ともに長く続けて来られたことを、家族・牛飼いの仲間・尺八の関係者の皆様に深く感謝したい。

琴古流協会奨励演奏会に出演して

大出翔童

奨励演奏会に出たことが私の尺八演奏の大きな飛躍になりました。

藤井治童先生宅に稽古に通い始めて五年半になりますが、四年を過ぎた二年前に先生から出てみないかと勧められ、全く自信がなくお断りしました。一年が過ぎて再度勧められ断り切れず受けてしまい、しかも好きな曲という理由で、一度も独奏したことがない「赤壁賦」をエントリー。想像しただけでも恐ろしい決断をしたものでした。

しかし、演奏会までの六か月間の先生の熱心なご指導のお蔭で、何か所かのミスはあったものの無事完奏出来ました。私の尺八演奏の宝物となっただけでなく、これから先の大きな自信になりました。先生からは演奏会での出来不出来は問題ではなく、その間の稽古の積み重ねが大切なんだと言って頂いたことが心の負担を軽減してくれました。

尺八を習い始めて二十数年、「本当の尺八の音色」を追い求めて、なかなか届かなかったその域に若干なりとも近づいた実感が出てまいりました。遠回りして来ましたが、この奨励会への挑戦で、何とか仲間の皆さんの足元に立つことが出来たことを感謝しております。

これから一音一音を大切に、〝良い音色を出してますね〟と言って頂けるよう、精進して参りますので、宜しくご教授ご指導をお願い申し上げます。

ペルシャへの旅

中埜和童

旅の始まり

平成二十三年十月にペルシャ旅行を楽しんできました。本当は「イラン旅行」というべきなのでしょうが、「イランに行く」と言うと、「大丈夫？」と心配げに聞かれるので、「ペルシャに行ってくる」ということにしました。

ネットで旅行申込みをして、羽田から関空、ドバイ経由でテヘランに到着しましたが、関空ドバイ間は約十時間、ドバイ、テヘラン間は約二時間の旅でした。

イランでは外国人女性もスカーフをすることが決められているので、テヘランで飛行機から降りる時に妻もスカーフをして入国。入国審査が終わって、ガイドさんの出迎えを受けましたが、やっぱり、予想通り私と妻の二名のみのツアーで、専属ガイド・ドライバー付の大名旅行になりました。ガイドさんはイラン人ですが、日本で働いていた経験があり日本語で違和感なしに会話ができました。

テヘランからペルセポリスへ

テヘランでパーレビ国王時代の宮殿や考古学博物館を見て、市内のホテルで一泊した後、南部のシラーズに飛びました。イランは人口約七千万人、国土は日本の約四・四倍ですが、上空から見るとずっと禿山と砂漠が続いていました。

シラーズの近郊にある、ペルセポリスの遺跡（世界遺産）を見ました。約二千五百年前、アケメネス朝ペルシャのダリウス一世が作った立派な宮殿跡で、当時、ペルシャが二十八カ国の植民地を持っていた大帝国だったことがわかります。

ダリウス一世の息子の名を付けたクセルクセス門をバックに、ガイドと共に尺八を吹きましたが、イラン人は日本人と同じような哀愁を帯びたメロディーが好きだそうです。

ガイドが「イラン音楽博物館」のヘイダイ先生と懇意だということで、後日「イラン音楽博物館」を訪問しました。

ヤズドからイスファハンへ

その日は、シラーズの町に泊まって、翌日、ダリウス一世から更に二代前のキュロス王の墓（世界遺産）を見た後、禿山や、砂漠の中を四百三十ｋｍ移動して、ヤズドという町に移動しました。

この町では八十年ほど前まで、「沈黙の塔」といわれる所で鳥葬が行われていたそうです。

翌日、ヤズドから砂漠の中を三百三十ｋｍ移動して、世界遺産のイスファハンの町に行きました。

イスファハンは千六百年頃に、サファビー朝ペルシャのアッバース一世によって都が造られ、「イスファハンは世界の半分」と言われるほどの繁栄だったそうです。イスファハンはイラン高原最大の川、ザーヤンデ川の中流に位置する「イランの真珠」と言われる美しい古都で、今でもイランの人達は日本における京都のようにこの町を愛し、修学旅行の生徒や、若いカップルや家族が旅行に来ていました。イランの人達は親日的で日本人が珍しいようで、一緒に写真を撮ったりしました。

モスクは美しいタイルで飾られ、中央で音を出すと、すごい反響音が聞こえ、イスラム教の説教がよく聞こえるようになっていました。

イランはノン・アルコールの国で、私としては、久しぶりに一週間ほど肝臓孝行をしましたが、乾燥した国なのでビール無しの食事でも十分な自分を発見した旅でもありました。

イラン音楽博物館へ

イスファハンから飛行機でテヘランへ戻り、「イラン音楽博物館」へ急ぎ、尺八の源流である「ネイ」や、ギターの源流である「タール」や「シタール」、また、琵琶の源流などを見せてもらいました。

また、尺八とペルシャの民族楽器をお互いに説明を加えながら演奏したりしました。

「カマンチェ」という胡弓のような楽器の製作者であり、優れた演奏家としても有名な人が演奏をしてくれました。

お返しに私が尺八で「川の流れのように」と「三谷菅垣」を吹くと、別の人が「ネイ」を取り出してきて、吹き方を教えてくれました。

この交流を通じて「ペルシャは、音楽の故郷」の感を深くしました。

ペルシャの楽器はアケメネス朝のペルシャからシルクロードを通って中国に伝わり、更に飛鳥・奈良時代の日本に伝わったと考えられますが、この間に長い歳月が経っているのだなということが思い起こされました。

また、イランは国際的に多くの問題を抱えていますが、ペルシャの伝統が今も生きている国だと感じた旅でした。

尺八に挑戦

大場 恒男

出会い

趣味は七十歳頃までゴルフと言えましたが、年毎に回数・人数も少なくなっていた頃、職場の転勤があり、その勤務先で菅原加童さんにお会いできたことが尺八との出会いです。

その初日に菅原さんが社内を案内した後の休憩中に、正座して尺八を吹き始めました。

間近で尺八を聞いたのは初めての体験で、その音に凄い感動を受け即座に習ってみたいと思ったのです。

入門したいと申し出たところ、菅原さんは木の尺八を出してきて持ち方、吹き方、指の動かし方などを教えてくださいました。

入門

初めて手にする木管に嬉しくて興奮したことを思い出します。その日から、毎日毎日尺八を吹きましたが、二か月以上音にならず息音だけでした。そんなある日、ある時、音が出たのをきっかけに尺八の角度、息の量が大切であると気づきました。

色々と都合があり、その年の十一月半ばに菅原さんから連絡を頂き昭和五十六年に春日部教室を開設している琴古流の高橋星童師匠に紹介され、入門を許されました。

その教室には奈良県の秋篠寺の本尊伎芸天という芸能の神の大きな写真額を飾ってある和室で、身の引き締まる思いをしました。

師匠の門下生は元自衛隊員の木村さん、菅原加寿さんと飯塚洋子さんの家族的で思いやりのある方々で安心しました。

拍子と音

尺八は自分の気持ちとその場の雰囲気によって音が違うことを知らされました。自宅で吹くときは音が出て、指も動きましたが、稽古の日に師匠の前に座ると完全にロボット化して、思っている音も出ず、指も動かない状態が続きましたが、師匠の分かりやすい言葉で音を一つ一つ出しながらのご指導のお蔭で、「君が代」から童謡の曲を吹く事が出来るようになりました。

入門から五か月目に、師匠にお世話を頂き自分の竹を手にしました。その尺八を毎日のように色々な方法で磨き光が出てきましたが、尺八の音は努力

が足りないのか、なかなか光る音は出ませんでした。

練習不足の稽古日ほど思うように吹く事が出来ませんでした。そのような時でも、師匠は「習うは真似ること」等、言葉優しく、何回も繰り返し拍子、音出しを稽古して下されるので、頑張ろうとやる気が出ます。

現在、練習で続けていることは稽古中の全部を録音し、指摘された言葉、拍子等を何回も繰り返し聞き取り、合わせ吹きを実践している所です。

一番苦労していることは譜読と拍子で、何とか自分のものとして取得したいと思っているところです。

念願の初吹き

入門して六年目で「新高砂」の曲を吹かせていただきました。師匠の付き添いと糸方の心遣いもあり音が出たように感じましたが、殆んど夢中でした。

次の年は「千鳥の曲」で、下合わせの時に自分の竹「名」を問われて、答えることが出来ず、何も曲などのことを知らずに、只、吹くだけであることに反省させられ、初吹き当日まで曲の内容などを勉強したことを思い出します。

本年は「六段の調べ」というだんだん早くなる曲を、自分では相当稽古したつもりでしたが、下合わせから本番まで糸方のお蔭で吹く事が出来ました。

糸方の人達がどの曲も暗譜で演奏していることに気づき、その素晴らしさを知らされました。

来年度の初吹きは、一つでも自分自身をほめられるような音を出したいと稽古中です。

課題に挑戦

入門から八年目をこの十二月に迎えます。思い出すと「コロナ」の時期も、師匠のお蔭で場所を次々移して稽古をできた事に感謝しています。

最近では反省会等も少なくなりましたが春日部支部で尺八に出会ったことの幸せをかみしめて、尺八の奥深い課題に挑戦するため、急がず、稽古をしていく覚悟です。

同窓会で尺八演奏

中埜和童

私は中学・高校・大学と約十年間、吹奏楽部でトランペットを吹きましたが、三十五歳に尺八に転向して以来、約四十五年の歳月が過ぎました。

高校卒業とともに故郷の兵庫県尼崎市を離れて、全国いろいろな所で暮らしてきて今は東京で暮らしていますが、故郷のことはいつも思い出されてきます。

私が尼崎市立昭和中学を卒業したのは昭和三十四年で、ちょうど上皇陛下と皇太后の結婚式があった年であり今も鮮明に思い出されます。

中学校の同窓会は平成二十一年(二〇〇九年)に卒業後五十周年をもって解散しました。

尼崎で開催された最後の同窓会では関東で暮らす同窓生で箏・バイオリン・尺八のコラボを行い、中学校歌や「春の海」を演奏しました。

この時、中学二年生の時のクラス担当だった音楽の先生からお褒めの言葉を頂きました。

右・音楽の先生と左・美術の先生

県立尼崎高校の同窓会も東京から遠いので参加するのは億劫になりますが、墓参りをしたり、滋賀に住む姉を訪ねて昔話をしたり、琵琶湖周辺や比叡山などの史跡巡礼を組み合わせたりして出来るだけ参加するようにしました。

同窓会に参加をする時は尺八持参で、押しかけ演奏をしました。なるべく皆の邪魔にならないよう選曲には気を使い「高校三年生」「学生時代」「翼をください」「卒業写真」等々を演奏しました。

今年（二〇二四年）最後の同窓会を行うという案内があり、出かけて行って、昨年亡くなった谷村新司の「昴」を吹きました。吹き終わると思いがけずアンコールをもらったので美空ひばりの「川の流れのように」を吹きました。

もう尼崎に帰ることもなさそうです。

昭和四十一年三月、防衛大学校を卒業後、一般大学からの卒業生と合わせて約三百名が久留米・前川原駐屯地にある陸上自衛隊幹部候補生学校で一年間初級幹部になるための訓練を受けました。

防大卒業生が七コ区隊（クラス）と一般大学卒業生が三コ区隊に分けられて、普通科部隊の小隊長になることをイメージした厳しい訓練を受けました。

我々の一期後輩にはマラソンで有名な円谷幸吉さんが一般隊員から選抜された部内選抜幹部候補生として訓練を受けていました。

「二度とクルメー鬼川原」と久留米の地を後にしたものの、今では昔懐かしく仲間達と「不惑会」という名前で毎月の定例会と年一回の総会を行っています。

総会では各区隊毎に参加者が近況報告を行ったり謡曲・仕舞や草笛演奏、バナナの叩き売りなどの出し物もあり和気あいあいとして楽しい会ですが、全員傘寿を越え、あと何回開けられるかと着地点を探しながら会を続けています。

平成二十三年（二〇一四年）から総会の前に邦楽ミニコンサートを行っており、「瀬音」「五十鈴川」等の箏曲や「御山獅子」「尾上の松」「飛鳥の夢」「都踊り」等の合奏曲を四〇分程演奏して皆さんに楽しんでもらっています。

琴古流尺八 竹童社・藤寿会　「竹の心」第14号

発　　行　2024年９月
発 行 者　藤 井 治 童
〒157-0065　世田谷区上祖師谷6-29-3-102
TEL. 03-3307-5573
FAX. 03-5313-2151
発 行 所　株式会社創志
〒162-0801　東京都新宿区山吹町81番地
TEL. 03-3267-5503
FAX. 03-3235-3263